

信越化学工業株式会社

2022年3月期第3四半期 決算説明電話会議要旨

日 時	2022年1月27日(木) 16:00 - 17:00
開催場所	信越化学工業(株)
会社側出席者	・代表取締役社長 齊藤 恭彦 ・取締役兼専務執行役員 半導体事業担当 轟 正彦 ・常務執行役員 広報担当 秋本 俊哉 ・執行役員 経理部長 笠原 俊幸 ・広報部長 足立 幸仁
参考資料	2022年3月期第3四半期 決算短信

* このメモは電話会議でお話しした内容をまとめたものです。

【決算概要説明 (社長 齊藤恭彦)】

2022年3月期第3四半期(4-12月)

連結売上高：14,837億円(前年同期比 36%増)

営業利益：4,801億円(前年同期比 68%増)

経常利益：4,903億円(前年同期比 67%増)

純利益：3,531億円(前年同期比 66%増)

- 全事業が前年同期比で力強い増収増益を達成。収益伸長に特に貢献したのが生活環境基盤材料で、3.3倍の増益はシンテック社によるところが大きい。特筆すべき需要の強さが背景であった。

[セグメント状況]

- 【生活環境基盤材料】：

米国における住宅不足は深刻さを呈してきた。住宅需要は依然強く、供給は抑え気味。米国の連邦住宅金融抵当公庫の推計では、住宅不足は3.8百万戸ほどで、別の推定では5.5百万戸に及ぶとされている。同様のことが多かれ少なかれ他の主要国でも見られる。

一方、アジア市況に影響を与える中国事情だが、最近の中国政府の政策が需要と供給の両面で抑制的に働いているように見える。結果として、需給の不均衡は起きていない。また、原油価格は高止まっており、石炭の値段も再び上がってきている。直近の値下がり底打ちしたと見る。苛性ソーダは反転している。

- 【電子材料】：

デバイス不足はまだ解消していない。底流には、まず IoT、IoH、AR、VR、メタバース等の本格的な展開、つまり「世の中のユビキタス化」があり、次に Carbon Neutral 実現の必需品としての半導体、そして経済安全保障のための半導体サプライチェーンの複線化がある。希土類磁石にも同様のベクトルが働いている。EV 化の計画が前倒しになっており、車に限らず電動化が進む。経済安全保障の観点から、地産地消の調査・検討が EU と米国で進行している。

● 【機能材料】：

シリコン製品は段階的に値上げを通すことができしており、引き続き値上げに取り組んでいる。その一方で、新製品を増やし、製品構成をスペシャリティへさらに傾斜させる。セルロース製品の値上げにも鋭意取り組んでいる。

- 以上のような事情を踏まえ、全ての分野で投資を着実に実行していく。

[通期の業績について]

- 9ヶ月の実績と1-3月の見通しを勘案して、決算予想を上方修正した。2020年1-3月期から数えて、2022年1-3月期で8四半期連続増益を果たすことで、年間最高益となる予想値を達成すべく取り組んでいく。年間の配当予想も100円増やし400円にした。また、来期に向けた作業にも取り組んでいる。

【補足説明（広報部長 足立幸仁）】

- 2022年3月期の設備投資額は2,200億円、減価償却費は1,600億円の見込み（変更なし）。
- 業績予想の前提となる為替レートは、1-3月はUSドルが114円、ユーロが130円。
- 経常利益の為替感応度は、1円の変動でUSドルは年間49億円、ユーロは年間3億円。

【質疑応答】

〈生活環境基盤材料〉

Q	2022年の塩ビの見通しについて
A	<ul style="list-style-type: none"> ・アジアで見られた市況の下振れは底打ちしたと見ています。 ・（北米）2月に3セント値上げを打ち出したところもありますが、今のところ追従する動きはありません。ただ、今朝入ったニュースで同業他社の工場でタンクの爆発があり、どの程度の事故なのか詳細は得られていませんが、事故のあった工場での操業の立ち上げが遅れると、昨年発現した、供給の制約がまた今年も起こるのではないかと注視しています。

	<ul style="list-style-type: none"> ・需要は引き続き底堅く、お客さまの方で一時的に感染が広がり、人繰りが難しくして生産を調整せざるを得ない事態が12月、1月とありましたが、それも徐々に解消し正常化しますし、また春先に向けて在庫を持つ動きも出てきますので、需要は大丈夫だと見ています。アジアの値段と北米の値段を比べますとそれなりに差はありますが、北米の需給関係を見ると値段はそれほど調整局面に入ることはしばらくないと見ています。 ・需要は強いが、その一方で供給事情は昨年に比べれば緩和しています。需要の強さがどこまで持続するのか、金融の引き締めや、インフレの進行という要素もありますが、価格の調整が急に起こることではないと見ています。 ・北米においては、昨年と比較すると、極めて高い値段から今年は出発するということが、それから昨年12月に稼働を開始した新工場が今年フルに（約40万トン）寄与します。全て売り切る自信があります。
Q	シンテックの新工場について
A	<ul style="list-style-type: none"> ・新工場の塩ビの能力は29万トン/年ですが、モノマーの方が大きい増設になっています。これまでモノマーが足りないマテリアルバランスで来ており、今回稼働したモノマーをフルに塩ビにできるため、約40万トンの数量が増えます。
Q	苛性ソーダの状況について
A	<p>【市況】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・北米では上がり基調です。需要が強いのとシンテックの能力増がありましたが、（業界で）閉鎖される、あるいは閉鎖された能力もあるので、差し引きすると（供給能力は）増えていません。したがって需給の関係は良好だと言えます。 ・海運の乱れがまだ続いているので、アジアの市況がそのまま北米に持ち込まれることは、以前のようにはいかないということが未だありますし、今後もこの状況は続くと思っています。 <p>【需要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サプライチェーンの見直しで、レアメタル（例えばリチウムなど）が米国で多く作られる可能性は十分にあり、期待しています。苛性ソーダの不足が生じるかどうかは、米国内で（レアメタルの）能力がどの程度立ち上がるかにもよりますので、注視しています。

〈電子材料〉

Q	2022年のウエハーの見通しについて
A	<ul style="list-style-type: none"> ・3つポイントがあります。一点目は、地政学要因を含めたマクロ環境の動向です。半導体産業は経済に直結していますが、好調が持続するのか、何か問題が

	<p>起きるのか、まだはっきりとは読めません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・二点目は、お客様の在庫政策です。半導体不足の中、サプライチェーンの各所で在庫積み上げが行われていますが、目標在庫にいつ頃到達するのかがポイントです。ウエハーの口径によって到達のタイミングはずれると思いますが、各デバイスメーカーは積み上げた在庫を景気の変動によって取り崩すことはないと見ています。今までの標準在庫から積み上げた在庫水準となり、一定在庫月数に達した後は、その水準が維持されると見ています。 ・三点目は、2022年にデバイスの新規需要が多く立ち上がってくることです。高速通信、EV、グリーン投資に加え、将来のメタバースに向けた新たな投資が始まる年になると見ています。
Q	300mmウエハーの設備投資について
A	<ul style="list-style-type: none"> ・契約をもとに逐次増設をする方針は一切変えておりません。 ・現在、当社はフル稼働を続けておりますが、需要に応えきれない状況です。2022年、2023年のブラウンフィールド投資は限定的であり、グリーンフィールドの投資が寄与するのは2024年以降となります。そのため、300mmウエハーの供給が不足する状況はしばらく続くと見ています。 ・建設資材、製造・検査装置や材料、原料の価格が上昇しており、1年前に投資を検討したときと比べて単位当たりの投資金額が相当上がっています。 ・ウエハーの製造装置は各社固有のものが多く、装置メーカーの製造能力も限られていることから、短期で大幅に増産することは困難です。
Q	2022年以降の価格について
A	<ul style="list-style-type: none"> ・2022年は、既締結契約に加え、価格値上げにより増量に応じたケースがあります。 ・2023年は、過去に締結した長契比率が2022年より低く、増量に対応できた分価格は上昇しています。2024年以降は、新規ラインの能力が立ち上がっていきますので、価格上昇が一段とステップアップすると見ております。
Q	エピタキシャルウエハー（EPW）について
A	<ul style="list-style-type: none"> ・足元では、少しずつEPWの構成比が上がっておりますが、今後はメモリー系デバイスの動向がポイントになります。ここにきて、メモリーメーカーからも今年の増量要請があり、少しアクセルを踏み始めたような印象を持っております。そのため、EPW比率は多少上がると思いますが、一方的に上がるとは考えにくいです。
Q	SiCウエハーについて
A	<ul style="list-style-type: none"> ・Siウエハーに対して、SiCがどの程度構成比を上げていくかははっきりしてい

	<p>ませんが、大電力向けを中心に徐々に需要は上がっていくと見ています。一方、供給力、品質面ではまだ課題があると見ています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当社もかなり前から SiC の研究開発を続けており、一部顧客から高い評価も頂いており、今後の量産化に向け鋭意検討中です。
Q	フォトレジストと EUV マスクブランクス の状況について
A	<ul style="list-style-type: none"> ・レジストはまもなく竣工する新工場（直江津）を稼働させても足りないほど需要が強い状況です。この新工場の前段として試作ラインを設置しましたが、それも投入して、繋いでいる状況です。 ・EUV マスクブランクスは量産体制の構築に着手しました。EUV マスクブランクスを使われているお客様はそれほど多くない中で、強い要請により開発を進め、ようやくここまで来ています。具体的な日程については別途発表します。

〈機能材料〉

Q	シリコーンの値上げと 3Q（10-12月）の業績、4Q の見通しについて
A	<ul style="list-style-type: none"> ・原料である金属珪素の値段は一時相当に高騰しました。その後、下がった現状価格ですら、歴史的に見ると高い水準です。こういう価格水準で落ち着いてしまうような形勢がありますので、値上げした価格は維持していきます。また、製品によっては値上げに時間のズレがありますので、遅れている製品についても値上げを行っています。 ・シリコーン全体は単に価格の転嫁だけでなく、いわゆるスペシャリティと称する付加価値の高い製品への傾斜、シフトを同時に行っています。そういった構成差もあり、総合的に見ると 7-9 月から 10-12 月を見ると、やや（利益は）凹んでいますが、1-3 月は回復できると考えています。

〈全 社〉

Q	4Q（1-3月）の見通しについて
A	<ul style="list-style-type: none"> ・7-9 月から 10-12 月にかけての基調に変化はなく、生活環境基盤材料の好調さが 1-3 月の収益に織り込まれています。
Q	株主還元、手持ち資金の水準について
A	<ul style="list-style-type: none"> ・配当については、長期に安定的にという基本方針に変わりはありません。長期に安定的にということからすると増配の幅が大きいと思われたかと思いますが、あくまでも 1 決算期で判断している訳ではなく、長い期間、安定的に配当するという方針の下で考えた数字です。株主還元は一つの経営課題として取り

組んでおり、その姿勢もきちんと示さなければいけないということの表れです。

- ・自己株買いは還元の一つの形であり、ROE や ROIC、特に ROE を向上させる資本政策の手段として考慮しています。
- ・手持ち資金は、今後業態を広げていくための投資の原資という位置づけです。また、ショックに耐えられ、絶対に潰れない会社であること、それがひいては株主の皆様への還元にも繋がることなどを考え、手持ち資金の水準を見ています。